

野間宏と地域人民闘争

― 雑誌「人民文学」と一九五〇年代

1

「小ブルジョアの自由主義、個人主義」への偏向を問題視した『近代主義批判』（第六回党大会、一九四七年十二月）が野間宏の「肉体は濡れて」や「崩解感覚」に対しても向けられた。野間は、その批判に応えるべく「自己意識からの脱出」を自己の文学の課題に据えたうえで、「この解決の緒を最近の日本の人民闘争のなかに得ることが出来た。そして共産党の細胞以外にこの問題の解決点はない」と断言したのは、一九四八年一月のことであった（『日本の最も深い場所』、「文藝春秋」第二七巻第七号、一九四九年七月）。野間によれば、「自己意識からの脱却」というテーマは、元々、反ファシズム運動を展開したアンドレ・ジッドが提出したものであるが、デモクラシーがファシズムを打倒し、社会主義社会の展望を拓いた第二次世界大戦後、このテーマは新しい形で再提出された。このなかで明確になった「如何にして行動から切り離された自己意識から脱して行動へ出て行くか」、「個人主義（ブルジョアジー）が上つくり上げたものとしての」を如何にして脱して行くか、「人間の個性を如何にして超えるか」という三つの問題の「解決の緒」を、地域人民闘争のなかに発見したのであ

る。

地域人民闘争とは、マッカーサー連合国軍最高司令官の命令で中止させられた一九四七年の二・一ゼネストの後、日本共産党が編み出した戦術であった（第六回党大会）。ストライキは全国規模でなければマッカーサーの命令に抵触しない、地域ブロック単位で独自に闘争すればよいと判断して、地方自治体や地方警察をターゲットに党細胞（支部）が中心となった闘争を展開した。一例として中小商工業者による反税闘争があげられる。アメリカ帝国主義との闘争が不可能である以上、アメリカ帝国主義とブロックを組み、限定的ではあるが独自権力を持つ日本の反動政府に対して、広汎な大衆を日常生活における闘争に動員しなければならぬという方針が採られたのである。

野間にとって、党支部活動に関わって地域人民闘争に参加することは、『近代主義批判』克服のために「自己意識からの脱出」をなしとげる方法であった。文京区の製本屋街には南京虫が出るので、保健所にその駆除を依頼するという地域住民の生活上の課題解決を地方自治体に要求する運動に、野間は党文京地区委員として参加した^{（1）}。それまで内向的な作品を創作していた野間が急旋回し、「作家が闘争のなかに参加して、そこで多くの人々の現実の生活を知り、その現実の変革

尾西康充

をすすめる実践、闘争によって、深く人間、物事のいろいろな姿にふれる」ことを主張しはじめたのは、本多秋五からみれば「まさしく宗教的回心という外ない」理解不可能なものであった。⁽³⁾日本共産党が分裂した後、主流派に連なる雑誌「人民文学」の作家グループに加わった野間は、後年になって「地区委員として地域人民闘争を支持したというので、後にきびしい批判をばくは受けますが」と回想している。⁽⁴⁾主流派の東京都委員会は、国際派の文京区地区委員会との対立を解くために、野間に仲介をとるのを依頼したこともあったとされる。⁽⁵⁾だが日本共産党は第六回全国協議会（一九五五年七月二七～二九日）を経て、地域人民闘争はアメリカ占領軍との対決を回避し、大衆の日常的要求や日常闘争だけをおこなう「右翼日和見主義」でしかなかったと総括したのである。

当時、党文化人による活動は、徳田球一や西沢隆二（ぬやまひろし）による指導の下、地域人民闘争の戦術に結びつけられ、文化工作隊の活動と一体化することが要請されていた。青山敏夫「文化工作隊について」（「前衛」第三四号、一九四九年一月）によれば、「文化工作」ということは、党の政策を文化的方法、手段で具体化すること」で、文化工作隊とは「この政策をおし進めるための一つの部隊」であるとされた。地域人民闘争は本質的には「右翼日和見主義」でありながら文化活動は政治に従属した「極左的な」戦術が採られるという矛盾が生じていたのである。

その後、コミンフォルムによる干渉によって日本共産党が分裂すると、地域人民闘争は徳田や西沢たち主流派の主要な戦術として位置づけられ、「文化の政治への従属」がより明確にされて、「地域人民闘

争を発展させるという観点にたため文化運動は、無意味である」と断定されるまでに至った（「文化闘争における当面の任務——全国文化工作者会議の報告と結語」、一九五一年四月）。主流派が武装闘争に路線転換し、小ブル的偏向を抱えた職業作家の《思想改造》が要請されるようになると、野間もそれに応じた作品を創作するようになる。混乱を極めたこの時代の文学団体の活動と野間の作家活動を、以下に検討してみよう。

2

かつて花田清輝は、軽妙な寓話を使って文芸評論家を揶揄したことがある。推理小説の読者には、最初に結末のページを開いて、誰が犯人であるのかをたしかめておいてから、おもむろに最初のページにとりかかるような「チャッカリした連中」がいる。実際、花田の周囲にいた「一部の進歩的な知識人たち」がそのような「推理小説の性急な読者たち」に似ているとし、「かれらの優越感をささえている知識」は「かれらがみずからの手で、一步、一步、ねばりづよく分析していたあとで獲得したものではなく、あべこべに、分析をサボったために、いちはやく手にいれることのできたものにすぎない」と批判した。⁽⁶⁾

このような花田の言葉は、過去の歴史を論じる者には、つねに心に刻んでおかなければならない戒めである。しかし五〇年代の党および文化団体における分裂抗争を振り返る際、組織における意思決定の方法や結果に関して、同時代の関係者によって著された回想録のなかに不明瞭な点が多いのにもかかわらず、旧ソ連史料等で冷戦期の国際政治

を検証した下斗米伸夫『日本冷戦史1945―1956(増補改訂版)』(二〇二一年六月、講談社文庫)を参照すれば、それらの真相が解るようになる。

たとえば、日本国内でソ連派と中国派に分かれるという事態が生じたのは、下斗米氏によれば、東欧ではソ連共産党が一元的支配をおこなったのとは対照的に、東アジアでは「対米関係など戦略的問題をソ連共産党が担当し、アジアの共産党への指導、解放運動の舵とりを中国共産党に任せる」という「パワー・シェアリング」をスターリンが承認したこと起因する。⁽⁷⁾一九五〇年二月に締結された中ソ同盟(中ソ友好同盟相互援助条約)は一九六〇年代はじめまで「日本共産党の最高方針の決定から組織、人事、分派競争に至るまで」深い影響を及ぼし、六〇年代の中ソ対立の時代になるとそれに巻き込まれることになった。⁽⁸⁾「人口五億人以上の大国である中国」は、東欧でソ連が設けた衛星国のようなものでは決してなく、むしろ「スターリンの意図に抗して成立した同盟関係というべきであり、相互の思惑は必ずしも一致しない同盟」であったからだというのである。⁽⁹⁾

一九四九年一月二三日の第二四回総選挙で日本共産党は二九八万票を獲得し三五名の議員が当選した。アメリカの占領下であっても議会を通じての平和革命が達成可能であるかのような感覚が生まれていた。だが一月に北京で開催された世界労連のアジア・大洋州労働組合会議で、劉少奇中国共産党副主席は、アジアの労働組合の基本任務は帝国主義との闘争であり、共産党に率いられた人民解放軍による武装闘争が民族解放闘争の基本的な形態であるという極左路線を主張した。農村では武器を取り、都市では非合法の形態をとるという「劉少

奇デーゼ」には、ヨーロッパの共産党系労働組合やアジアの労働組合関係者が反対し、一旦は公表記録から削除されるのだが、その戦術は正しいのだから公表すべきだとスターリンによる指示が出され、毛沢東もそれに同意した。この結果、中国で成功したきわめて「例外的なもの」と思われていた毛沢東主義が「いまや世界の戦略の方針」に格上げされ、「アジアの労働運動、共産主義運動だけでなく冷戦の行方にも影響を与える決定的な転換」になったのである。⁽¹⁰⁾

一九五〇年一月六日のコミンフォルム機関誌「恒久平和と人民民主主義のために」は「日本の情勢について」を掲載し、一九四五年一月に野坂参三とソ連指導部が合意していた柔軟な対日政策、すなわち米軍占領下での平和革命論を唱えていた野坂参三を批判した。突然一方的な論説が発表された背景には、一九四九年一〇月に中国共産党が権力を掌握したことによって、ポツダム宣言以来の米ソの同盟的利益がほぼ完全に消失し、平和革命論がその基盤を失ってしまったことがあった。

日本共産党政治局は一九五〇年一月一二日に「所感」を発表し、コミンフォルムの批判を「人民大衆の受入れがたいもの」と言及するのだが、同月一七日の中国共産党中央機関紙「人民日報」がコミンフォルムを全面的に支持する社説を掲載した。同月一八―一九日の日本共産党第一八回拡大中央委員会総会において、「所感」を発表した徳田・野坂たち主流派と、コミンフォルムの批判は受け入れるべきだとする宮本顕治・志賀義雄たち国際派とが対立した。宮本は文化担当の理論家として東京大学細胞や全学連指導部、新日本文学会指導部からの支持があつたが、九州地方へ長期出張を命ぜられ、統制委員会議長を

務めていた宮本の職は、椎野悦朗にとって代わられた。三月二日に主流派は「民族の独立のために全人民諸君に訴う」を発表し、民主民族戦線の結成を呼びかけた。

六月六日にマッカーサーが日本共産党中央委員二四名、翌七日に「アカハタ」編集部員一七名の公職追放を指令すると、主流派は表向き、臨時中央指導部を任命したうえで、大半の幹部や党員は地下に潜行した。徳田や西沢、野坂たち最高指導部は北京に亡命機関を作ろうとして離日した。六月二五日に朝鮮戦争が勃発し、一〇月に中国が朝鮮戦争に参戦すると、主流派は次第に急進化して、翌五年二月二二・二七日の第四回全国協議会で武装闘争の方針を固めたのである。

党綱領の改定についてスターリンから直接指示を受けるために、一九五一年四月末、徳田や西沢、野坂たち北京機関の幹部はモスクワ郊外にあるスターリンの別荘を訪問した。その頃モスクワにいた国際派の袴田里美も呼ばれて後からこの会議に参加した。一〇月一六・一七日の第五回全国協議会で新綱領「日本共産党の当面の要求——新しい綱領」（「五一年文書」）を採択し、軍事方針を明確化した。下斗米氏によれば、このような「日本共産党主流派の動き、非公然活動への移行は、モスクワや北京による緊密な指導下で、朝鮮戦争という状況と連動した動き」であったとされ¹¹、「日本共産党綱領を策定する最高責任者は当時「全民族の父」スターリンであった」うえに、「モスクワの決定に中国共産党、とくに劉少奇も関与していたという構図」が明らかであったという¹²。

他方、党中央委員を排除された国際派——宮本、志賀、蔵原惟人、袴田、春日庄次郎、亀山幸三、神山茂夫——は全国統一委員会を組織

して対抗しようとした。だが中国共産党が一九五〇年九月三日の「人民日報」で「今こそ団結して敵にあたるべきである」を発表し、党の統一を要望したことによって、国際派内で対立が生じ、党に復帰しようとする志賀と、全国統一会議を組織して独自路線を進む宮本とに分裂した。それと同時に、主流派内でも統一に向けての自己批判の圧力が高まり、自分たちの理論的水準の低さや議会を通じた平和革命論が誤りであったことを認めた。翌五年八月一〇日にコミンフォルムが四全協の「分派主義者についての決議」を支持し、国際派が主流派へ復帰することを求めたことで大勢は決した。八月二三日に袴田が自己批判をおこなって事実上の国際派の敗北を認め、宮本たちの統一会議も解散声明を出して復帰した。

だがこの間、主流派によって労働者の蜂起と農民のパルチザン闘争が計画され、中核自衛隊が創設された。一九五二年には遊撃隊によって白鳥事件や、血のメーデー事件、枚方事件、吹田事件、大須事件がつづけて引き起こされるとともに、山林地帯には山村工作隊が配置され、革命根拠地が形成された。アメリカ主導の日本の農地改革は地主の抵抗によって不完全に終わり、山岳森林地帯では、未解決の土地問題をめぐって階級闘争を激発させることが目指されたのである。東京奥多摩の小河内村では、学生党員たちが米軍基地に電力を配給するダム建設に反対し、地主の山林を解放する拠点を設置しようとした。無謀ともいえる「極左冒険主義」によって国民からの支持は失われ、日本共産党は一九五二年一〇月一日の第二五回総選挙で得票数八九万票、獲得議席ゼロ、翌五三年四月一九日の第二六回総選挙では川上貫一の一議席を確保したものの六五万票まで退潮していたのである。

3

一九五三年三月五日にスターリンが死去し、七月二十七日に朝鮮戦争の休戦協定が締結された。翌五四年一〇月にフルシチョフと毛沢東が新しい東アジアの政策を協議し、中ソと日本の平和条約批准が目指されることになった。一九五六年二月のソ連共産党第二〇回大会ではフルシチョフがスターリンを批判し平和共存路線を示し、国際社会に大きな衝撃を与えた。

一九五五年七月二七～二九日に第六回全国協議会が開かれる。下斗米氏によれば、「六全協の新方針はその一年前にすでにモスクワで検討が進められており、それは宮本顕治や志賀義雄等国際派の復権と軌を一にしていた」とされ、「日本共産党の軍事綱領がサンフランシスコ条約の裏返しであったとすれば、六全協はこれまた日ソ平和条約への動きと表裏であった」という。¹³党内外に大きな混乱を招いたにもかかわらず、スターリンに矛先を向けるのが憚られたことや、極左路線に実際に関与した数名の中国共産党員に付度したことなどから「極左冒険主義」への過度な批判は、六全協では控えられた。¹⁴モスクワの指示に従って今回は逆に、武装闘争方針を修正し、非合法から合法舞台への転換を進めて、国際派の党復帰を認めたのである。

六全協で宮本が新規約採択に関する演説をおこなうことになったのは、北京機関が一九五四年四～六月モスクワで中ソ共産党代表と六全協の決議原案を作成した際、宮本を復帰させて党を指導させることが話し合われていたからである。下斗米氏によれば、「宮本には北京主

導の和解の代償として書記長職が用意された」とされ、「実際には、彼が書記長になるのは一九五八年だが、宮本が党組織を手がかりに権力をねらう構図が透けて見えた」という。¹⁵一九五五年二月二十七日の第二七回総選挙で日本共産党は七三万票余を獲得し、志賀義雄と川上貫一の二議席を確保した。

一九五五年一月一八～二一日の新日本文学会第七回大会では、徳永直や安部公房、野間など「人民文学」作家グループが復帰し新日本文学会に統一されることになった。彼らは同会常任幹事に就任した。統一の方向性はすでに一九五二年三月二八日～三〇日の第六回大会で呼びかけられていたものであった。

しかし当時の新日本文学会は、「人民文学」に参加した会員による会費滞納が常習化し、財政が行きづまっていた。花田清輝編集長の下で機関誌の増頁増冊を決めたものの、それでも問題は解決されず、会費滞納者の整理が必要になった。発足以来、文学を専門にしないサークル雑誌の書き手などを大量に入会させていた結果、第六回大会時点で会員数は約一六五〇名に上っていた。そこですべての会員にハガキでアンケート調査をおこなうことになったのだが、回答者は四八〇名しかいなかった。この問題は『真空地帯』の解釈をめぐる大西巨人・武井昭夫と宮本との間でおこなわれていた論争にも影響を与えていた。大西は、野間が木谷一等兵に軍国主義の転覆を期待しているのは「全篇にみなぎるインテリゲンチア侮蔑の感情」とともに「はつきりした反戦的な社会主義的思想」に無縁な「一種の大衆追随主義・俗情との結託」であると痛撃した（「俗情との結託」、「新日本文学」第七巻第一〇号、一九五二年一〇月）。『真空地帯』の解釈をめぐる

ではじまったこの論争は、新日本文学会の再編・再組織問題にも及び、会員の整理を進めようとする大西・武井に対して、宮本はどのような機械的なやり方ではなく手段をつくして現会員の確保に努めるべきだと反論した。日本共産党元中央委員の亀山幸三は、第七回大会をつぎのように回想している。

一九五五年二月頃、新日本文学会の大会があった。宮本派對武井昭夫、大西巨人、野間宏らで非常に紛糾した大会であった。私はある人から「傍聴ぐらいしておけ」とすすめられたので、のぞいてみた（牛込公会堂であつたと思う）。そのときは、宮本は出席していなかったが、かなり緊迫した空気、両派がやり合っていた。その頃は明らかに宮本の代弁者は、蔵原だつたと思う。自分の背後に政治的実力者の存在をはめめかす発言をしていた。私はこの間の経過を、あとで興味にかられて新日本文学会の人から聞いたのだが、たしかに宮本（またはその代弁者）はこの時点で、党権力に近いところにいる態度であつた。それはあとで考えると宮本が中央指導部に入る直前のことである。¹⁶

さきに紹介した下斗米氏の分析に従えば、宮本および宮本派が新日本文学内で力を持ったのは、理論闘争によってではなく、会の外部にある《国際的権威》によって彼らの権限を承認されていたからであった。日本共産党は「その宿痾であつた国際的権威主義と内部対立」を抱えつづけていたとされるが、残念ながら本来自律的であるべきはずの文学団体においてもまったく同じ傾向がみられたのである。¹⁷ 主流派

および国際派ともに何か誤っていたのか、それを十分に見届けてから再出発できなかったのは、「六全協が日本のなから生れたのではなかったから」であると、後年になって日本共産党を除名されてから野間は、非難することになる。¹⁸

新日本文学会の五〇年分裂を回想した秋山清は『文学の自己批判——民主主義文学への証言』（一九五六年九月、新興出版社）のなかで、「多くの会員の精神的従属性」を非難している。宮本や蔵原惟人たちが国際派に属した新日本文学会の「中央グループ」について、つぎのように論じている。

たとえば、宮本顕治、蔵原惟人などナツプ以来の左翼文学運動のベテランが、その実力と経歴と経験とを、人民文学グループのための混乱期、日本共産党の破壊的工作のつづいた二、三年の重要で困難な時代に出てきて全力的に協力しなかつたような経験——中央及び地方における、共産党への気がねや思惑等々のための非協力、さらに新しい常任委にたいする不信と反感からくる非協力等々のために、衰弱し、やせ細って名簿上の会員の過大が借用証文のように積み上げられた現状において、それが現れた。¹⁹

宮本や蔵原の「気がねや思惑」の原因は、当初はコミンフォルムからの批判を全面的に受け入れようとしていたのが国際派であつたにもかかわらず、主流派がスターリンからの指導を容れて武装闘争を新綱領に掲げるや、《国際的権威》からの支持を受ける立場が一気に逆転してしまつたことにある。《国際的権威》の前に、本来文学者には不

可欠であるはずの《自律性》が機能不全におちいついたといわざるを得ないのである。他方、野間をはじめ藤森成吉や江馬修など主流派の文学者たちが集まった「人民文学」作家グループが新日本文学会の「中央グループ」に対しておこなった「非難攻撃」に対しても、秋山は異議を申し立てる。

人民文学グループから当時の常任中央委員会に向けた非難攻撃が、会の組織性格を無視したために、会を困乱させたことを、私は一会員として憎んだのである。そのように組織を無視する精神は、彼らが日共主流派の権威を笠に着たところからきていた。

私が金輪際軽蔑したいのは、権威権力を笠にきたときはイヤに強くなるその裏がえしの奴隷根生である。²⁰

中野重治や窪川鶴次郎たち新日本文学会の「中央グループ」は「党中央に巣くう右翼日和見主義分派に対するわれわれの態度——党のボルシェヴィキ的統一のために」（一九五〇年八月）という声明書を作成して公表した。第一八回拡大中央委員会総会と四全協の間、まさに主流派と国際派との間で主導権争いが活発化していた時期である。「所感」を批判しコミンフォルムからの批判を全面的に受け入れることを主張した国際派は、主流派から分派よばわりされていたが、自分たちこそ《国際的権威》に認められた本来の《主流派》であって、コミンフォルムに刃向って「所感」を表明した主流派こそ分派であると反論していた。そのうえで国際派は主流派に対して、理論の学習を軽視した「卑俗な「実践主義」」にもとづく「党内官僚主義」や、「統一戦

線の名において党内外の芸術家・インテリゲンチヤにたいするその場限りの利用主義と事大主義」などの欠点をあげて主流派の文化政策を痛罵したのである。

これに対して臨時中央指導部は「新日本文学会中央グループ内的一部分派主義者の声明について」（一九五〇年八月）を発表し、彼らが「極端な小ブル的セクト的実践」におちいついているために、宮本百合子の「小ブル性のつよい作品」に過大評価を与える反面、江馬や徳永直たちのルポルタージュにほとんど正当な評価を下せていないこと、「人民の革命闘争とは無関係」な島尾敏雄「ちっぽけなアヴァンチュール」や、「明らかに党の権威と信用とを大衆の面前において失墜させる効果しかもたない分派的作品」である井上光晴「書かれざる一章」を掲載する一方、「真面目な職業作家の投稿」には見向きもしないこと、職場サークルを軽視し大衆の参加を実質的に拒否していること、大衆のなかでの活動の意義を過小評価して「ブルジョア文壇に寄食する」という小ブル的態度をとっていることなどをあげて攻撃した。

そして、このような主流派の主張に沿って「人民文学」が一九五〇年一月に創刊されたのである。この当時の主流派と国際派との論争は、国際派側の主張は、中野「『人民文学』と江馬の言葉」（『新日本文学』第六巻第一号、一九五一年一月号）、同「雑誌『人民文学』に対するわれわれの態度——一九五〇・一一・二〇」（同第六巻第二号、一九五一年二月）、同「地方選挙と文学の目」（同第六巻第五号、一九五一年五月）、新日本文学会常任中央委員会「日本共産党臨時指導部は平和と人間性との敵か」（同第六巻第六号、一九五一年六月）、中野「嘘と文学と日共臨中」（同右）、水野明善「文化文学戦線統一

のために」(同第六卷第七号、一九五一年七月)などにみられる。他方、国際派側の主張は、江馬「文学の大衆路線へ——なかの・しげはるの「人民文学と江馬の言葉」を読んで」(「人民文学」第二巻第二号、一九五一年二月)、島田政雄「文学運動のあたらしい方向」(同第二巻第三号、一九五一年三月)などにみられたのである。

4

文化運動に対する臨時中央指導部の方針は、川崎巳三郎「文化運動の当面の任務について」(「前衛」第五三号、一九五〇年十二月)を通じて明確にされた。蔵原惟人に「小ブルジョアの偏向」が存するとし、「政治への文化の従属を口さきだけで一応認めながら、文化運動が党の戦略・戦術に従属しなければならない」ということを、頑強に拒否する偏向がある」と批判した。平和革命を前提とした文化革命論という「蔵原理論」を支持する新日本文学会の「中央グループ」を「分派」と決めつけ、「分派を党内から一掃」するとともに「分派との闘争を妨害する中道主義者」と徹底的に闘うことを唱えた。このような方針に沿って、「人民文学」では宮本百合子に対する中傷に加えて、蔵原や宮本への攻撃が執拗におこなわれたのである。

「文化運動の当面の任務について」によれば、イデオロギー闘争では、「宙に浮いたプロレタリア文化作品の優秀性」を誇示するのではなく、「専門文化人がみずから進んで労働者階級その他の大衆の中にゆき、自己を訓練してゆくように指導し、そのうちの優秀分子を党に吸収してゆくこと」が必要とされる。その際、大衆のなかでの文化活

動の基本組織は、文化サークルであるとされるのだが、「大衆の自主的組織」という原則を貫きながらも「機関・細胞の指導を確立」しなければならぬと厳命されている。

さらに前出の臨時中央指導部「文化闘争における当面の任務——全国文化工作者の報告と結語」は、地域人民闘争を「われわれの戦略目標を達成する民主民族戦線の拡大強化を実践的に遂行してゆく戦術の基調」であるとす。 「各種文化団体の中央グループによる引廻し指導を排除し、文化運動にたいする党機関の指導を確立しなければならぬ」としたうえで、「ますます悪質になってきている文化面における分派主義者と徹底的に闘い、これら不純分子をわれわれの陣営から放逐すること」が必要であると訴えた。「分派」が新日本文学会の「中央グループ」を指しているのは明白で、「従来の文化運動に小ブル的な文化中心主義的偏向」があったことを批判している。文化は人民大衆のものであるとし、第一に労働者階級のためのもの、第二に貧農を中心とする農民のためのもの、第三に小市民・学生・小ブル・インテリゲンチヤのためのもの、第四に民族資本家のためのものとランク付けする。もし文化活動の重点を取り違えるならば「プロレタリアートのヘゲモニーが否定され、文化活動を党の戦略戦術に従属させることはできなくなる」と断言している。

「人民文学」は《政治の優位性》——「芸術が政治に従属し、階級闘争の武器として貫かれる」という考え方を自明なものとする。新日本文学会が「文学の普及活動はサークルがやり、達成は職業文学者が担う榮譽であるかのごとき理論と実践指導」をしていたのを批判し、「普及活動を底辺として達成との統一的把握」が「文学者の人間

革命」を不断に推し進めるのだとする（増山太助「サークル活動における普及と達成の統一」、「人民文学」第一巻第二号、一九五〇年二月）。そしてそこで「小ブル的偏向」を抱えた職業作家の《思想改造》が要請されることになるのであった。

一九五〇年当時の野間は、五月に長篇小説『青年の環』第二部を河出書房から刊行し、翌六月に「皮の街」（『青年の環』第二部第六章）を発表するが、続編の執筆は一九六二年まで中断してしまう。一九五一年一月から二月にかけて「真空ゾーン」のタイトルで『真空地帯』の約三分の一に当たる部分を雑誌「人間」第五巻第一、二号に連載する。翌五二年二月に『真空地帯』を河出書房から刊行し、戦争文学の作家としての声望を高め、対立する作家グループの双方から信頼を得ることにつながった。「人民文学」は編集委員会が雑誌編集をおこなったが、議長の野間が委員会の話し合いを総括して責任を持ち、編集実務については編集委員会から選ばれた編集長が責任を持つという体制であった。²¹⁾

中野の「嘘と文学と日共臨中」によれば、野間は新日本文学会常任中央委員に選ばれてからの「丸九ヶ月、常任委員を完全連続無届欠席」したとある。九か月前といえ、ちょうど新日本文学会中央グループが声明を発表した頃になるのだが、本多秋五は「少くとも初期の『文化タイムズ』時代」に彼らと野間との間に意見の対立があったのではないかと推測している。²²⁾

野間は「詩人は動きはじめている」を「新日本文学」第五巻第九号（一九五〇年十二月）に寄稿する一方、「人民文学」に寄稿したのは、一九五一年二月から二回連載した「夜の脱柵」をはじめであった。

内務班の私的制裁が描かれ、兵士が兵営からの脱柵をおこなうという点で、「夜の脱柵」は同時に執筆中であつた『真空地帯』のスピノフとみなせる作品である。漢口の陸軍部隊、揚子江の下流に移動して約二か月駐屯しているが、まもなく南方に進軍する命令が発せられる。四年兵は召集解除になるどころか彼らも南方に移動する部隊に編入されているのを知って、「その不満のばくはつが一日中部隊のあらゆる班内で繰返し起る」のであった。三〇歳をこえた横田二等兵は、菓種商の次男に生まれるが、兄が中学のときに死亡したので一層大事に育てられた。しかし菓種の試験を二度不合格になって地方の高商に入学した。体力のない彼が羨望せずにはいらなかったのは、頑丈な体格を持った農家出身の山下二等兵であつた、彼には吃音があつたが、その風貌とは裏腹に「やわらかい心」を持っていた。彼ら初年次兵のなかでもとくに古年次兵から殴られる回数が多いことから、横田二等兵と山下二等兵は次第に固く結びつくようになっていた。夕食後の食器洗いが終わった後、横田二等兵と山下二等兵、上山二等兵の三人は、歩兵部隊の柵を潜り抜けて、物資の豊富な輜重隊の酒保へでかける。コーヒを飲み罐詰を買って帰ろうとするのだが、巡察將校に見つかってしまふ。ひとり逃げ遅れた横田二等兵の耳には、八時の点呼ラッパの音が自分の部隊から聞こえてくるのであった。

「夜の脱柵」の結末が『真空地帯』のそれと大きく異なるのは、脱柵をして規律違反をした兵士たちが軍隊組織をその根底から否定するような視点を持っていたわけではなく、私的制裁の犠牲になっていた他の兵士一般と何も変わらないことである。『真空地帯』の木谷一等兵は、軍法会議の正当性を疑い、自分を刑務所に送った林中尉の居間

を襲つて殴り倒し、夜間脱柵して兵営から逃亡する。曾田一等兵は社会主義思想に感化され、ひそかに反軍思想を抱いている。『真空地帯』と対比すれば、「夜の脱柵」は兵士の厭戦気分を表現していたものの、反軍意識にまで高まるものではなかったといえよう。元兵士による戦争体験の回想録など数多くの作品が公刊されてきたが、戦争の悲惨さを語りながらもどこか武勇伝に終わってしまうものが大半であつて、真の戦争文学になるためには、生き延びるためには不可避免的なエゴと、人びとを疎外する社会組織の不合理を懷疑する視点が必須であらう。

ところで、野間が「人民文学」に発表した「国民文学について」（「人民文学」第三卷第九号、一九五二年九月）は、竹内好や伊藤整、蔵原たちが参加した国民文学論争にかかわつていた。スターリン理論に沿つて戦後日本は植民地従属国の革命方式を目指すべきだとした五一年綱領をふまえ、野間は「私たちの文学が民族解放の綱領を文学の面で具体化し、それを文学の面でかちとることをめざしている」とした。

私たちのめざすこの国民文学とは、現在の植民地下の日本民族の生活の苦しみや、喜び、それをはっきりと表現しそれを徹底的に解放する文学である。これまでの日本の近代文学は主として小市民層、インテリゲンチヤが中心になってきて生れてきたものであつてそれはまだ日本国民全体の心と魂を解放する形式をつくりだしてはいなかった。私たちはこの点をはっきりと批判してほんとうにひろく深く国民のなかにわけ入つてその魂を解放し、表現する文学を創造しようとするのである。

このような野間の主張に対して、蔵原は「国民文学の問題によせて」（『世界』第八六号、一九五三年九月）を発表し、野間が「共産主義者もしくは前衛的な労働者、農民、インテリゲンチヤにおける思想改造と、一般作家をふくむ国民全体の思想改造とを混同しているのではないか」と疑問を呈した。なぜなら蔵原にとって、野間が主張する国民全体の《思想改造》——「私たちが国民文学運動を日本の思想改造運動の一つとして考えようとするのは、日本文学をただ文壇文学から解放するだけではなく、日本人の認識感情のすべてを根底からかえることを考えるのである」——はあまりに性急な主張と思われたからである。蔵原は、民族の解放や国民の独立という意識を持った作家だけで国民文学が創られるのではなく、「あらゆる思想と意識をもち、さまざまな利害と問題をもっている国民とともに、そのような国民の意識と生活を反映する多くの作家とともに」創られるものであると提言したのである。

「人民文学」は一九五四年一月に「文学の友」と改題し、同誌第五卷第一二号（一九五四年一二月）に「新日本文学会第七回大会おめでとう」という記事を掲載して「国民の文学戦線統一」を呼びかけた後、一九五五年二月に廃刊になった。「人民文学」は、宮本百合子を中心としたことが誤りであつたのは言を俟たないが、松川事件をめぐる被害に詩作指導して特集を組み、広津和郎を闘争に参加させたことや、文学サークルを奨励し、現場の記録やルポルタージュを執筆する勤労者作家を育てたことなど、称賛すべき功績もある。「党派性」である面と「文学雑誌」である面とを総合的に評価すべきであるとする鳥羽耕史氏によれば、「それが後の歴史から見て間違っていたから表現を

無効としたり、現在の「文学」的価値基準に合わないから切り捨てるのではなく、「党派」だからこそ可能性を持っていた「文学雑誌」として「読み直すべきだ」という。²³

だがあまりにも混乱に満ちた「断層」の時代（成田龍一氏）ともいえる一九五〇年代の文学を、正當に評価するのは困難であろう。²⁴なぜなら「人民文学」は「文学雑誌」である前に、あまりに「党派的」であり、「文学的」である以上にあまりに「政治的」であったからである。たとえば、「人民文学」が育成した勤労者文学の代表作品は、米軍基地で働く日本人労働者を描いた春川鉄男の小説「日本人労働者」とされる。だが春川は、「日本人労働者」第一部を「人民文学」第二巻第六号（一九五一年八月）に掲載した後、続編が書けないでいた。編集を担当していた江馬修に書簡を送ってその理由を説明していたのだが、要するに、春川が「全生活を組織活動^マえ」という私の党生活^マを割いて小説を書くこうとすると組織活動で積極性を失い、「われわれの闘争にマイナスを演じる」結果になってしまったからだといふのである。²⁵労働現場を記録してそれをルポすることは、闘争そのものなのか、あるいは闘争を助けるものでしかないのか。野間も《実践と創作の環》という概念を提示してこの議論に参加するのだが、たとえば文学サークルが百花繚乱の様相を呈したとしても、組織の機関誌である以上、明確な意思を持った組織の《欲望》が雑誌に反映するのはやむを得ないだろう。どのような文学作品も本来、《読者の欲望》を引き受けた作者と《作者の欲望》を引き受けた読者との合作によって構成される。勤労者文学や職場文学のように、作者および読者の主体が組織のメンバーである場合、しかも組織から信任された編集者がそこ

に介在するのであれば、そこに集まった人びとの政治的《欲望》が雑誌の性格を決めることになるのである。²⁶

サンフランシスコ講和条約の締結直前、非合法の地下活動に入る準備をしていた党員の姿を描いた野間の『地の翼』は、六全協と同じ一九五五年七月に「文藝」に連載が開始されたが五七年三月で中絶し、続編は断続的に書かれるにすぎなかった。作品自体は公安警察と党員との間の虚実をめぐるスリリングなスパイ小説の様相を呈していた一方、日本共産党が武装闘争を掲げていた時代をどのように総括するつもりであつたのか、死の直前に約三〇〇枚の続稿が執筆されていたとされるのだが、その構想の詳細は分からない。野間が執念を持っていた難な課題に取り組もうとしていたことは、国際派の安東仁兵衛が後年になって回想した野間の姿に象徴されている。安東によれば、一九五〇年当時の文京地区委員会のメンバーが連絡のとれる限り顔を揃えて、分裂の事実と問題点をつき合わせようという会議に出席した野間は「重い口で、ねばり強く討論に加わっていた」という。²⁸

注

- (1) 野間宏「日本共産党の中の二〇年」（「展望」第七六号、一九六五年四月）
- (2) 野間宏「実践と創作の環」（「理論」第二八号、一九五二年八月）
- (3) 本多秋五「『人民闘争』と『回心』」（『物語昭和文学史』一九六六年三月、新潮社、六二三頁）
- (4) 前掲（1）と同じ。
- (5) 増山太助「『五〇年問題』覚書（下の一）」（『運動史研究』第六巻、

- 一九八〇年八月、三一書房、一六三頁)
- (6) 花田清輝「日本における知識人の役割——その功罪の歴史的展望」(『知性』第三卷第三号、一九五六年三月)
- (7) 下斗米伸夫『日本冷戦期1945—1956 (増補改訂版)』(二〇二一年六月、講談社文庫、一五九頁)
- (8) 同右、一六七頁。
- (9) 同右、一七四頁。
- (10) 同右、一八〇頁。
- (11) 同右、二二八頁。
- (12) 同右、二四七頁。
- (13) 同右、二八四頁。
- (14) 同右、二八六頁。
- (15) 同右、二八六頁。
- (16) 亀山幸三『戦後日本共産党の二重帳簿』(一九七八年一月、現代評論社、二二三頁)
- (17) 前掲(11)と同じ。
- (18) 前掲(1)と同じ。
- (19) 秋山清『文学の自己批判——民主主義文学への証言』(一九五六年九月、新興出版社、一八八頁)
- (20) 同右、一九二頁。
- (21) 鳥羽耕史「『人民文学』論——『党派的な『文学雑誌』の意義』」(『人民文学』解説・解題・回想・総目次・索引)不二出版、九頁)
- (22) 前掲(3)『物語昭和文学史』、四二九頁。
- (23) 前掲(21)、二二三頁。
- (24) 成田龍一「『断層』の時代——一九五〇年代前半の歴史像への試み」(『思想』第九八〇号、二〇〇五年十二月)
- (25) 「『日本人労働者』の作者から」(『人民文学』第二卷第八号、一九五一年八月、三四頁)
- (26) 高橋博史氏は、対立していた文学団体が新日本文学会第六回大会(一九五二年三月)で再統一したが、そのとき同会が新たに決定した綱領の第一項に「あらゆる文学者、芸術家と提携して平和と民族独立のためにたたかう」ことが掲げられていることについて、「文学的実践を、現実の政治課題のためのたたかいと重ね合わせる考え方、その背後にある、作品を、思想的、政治的立場の反映とみなす文学観は温存され、改めて宣言」された「だから何も変わらなかった。民主主義文学運動はこれ以後も、日共内部の対立に自ら繰り返しまきこまれていくのであった」と批判した(「『新日本文学』と『人民文学』の抗争」、「国文学解釈と教材の研究」三月臨時増刊号、一九八九年三月、一五九頁)。
- (27) 「地の翼」(『文藝』編集部編『追悼野間宏』一九九一年五月、二六〇頁)
- (28) 安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』一九九五年五月、文藝春秋社、二一四頁。

付記

野間宏の作品の本文は、『野間宏全集』(筑摩書房)に拠った。

(おにし やすみつ、三重大学人文学部教授)